

近藤重蔵と目黒新富士

松井 圭太¹⁾

キーワード

近藤重蔵、目黒新富士、富士講、富士塚、蝦夷、

はじめに

近藤重蔵は、江戸時代後期の幕臣で北方探検家として知られ、江戸幕府の命により蝦夷地踏査を5回にわたり行った。第1回踏査では、樺太から千島列島の情勢を探索すると共に、択捉島に上陸し、ロシアの立てた十字架を撤去し、「大日本恵土呂符」の標木を建てた。その帰路大暴風雨にあい足止めされたことから、重蔵は道路を掘削することを思い立ち、12キロにわたり襟裳岬付近（広尾～幌泉間）の道路開削をおこなった。これは蝦夷地における最初の道路掘削であり、現在のえりも町庶野から広尾町広尾橋までの32キロ続く国道336号線（通称「黄金道路」）の元となった。その他、重蔵は沙流川河口への義経神社創建や、高田屋嘉兵衛の協力のもと江戸と蝦夷地を結ぶ太平洋航路を開発するなど、近代以降の北海道開拓・開発の先駆として大きな業績を残した。

その後北方探検を終え江戸に戻った重蔵は、譜代の旗本に家格が上がり、書物奉行に昇進した。しかし、その後の人生は順風満帆とはいかなかった。重蔵は勘定方への移動を希望し、そこでの活躍を望むが叶わず、11年間書物奉行を務めることとなる。希望の役職に付けぬまま年老いていく焦りと不満を募らせる中で、富士講徒より「富士塚」という小型の富士山を造る話が持ちかけられた。重蔵は、役職の怒りをぶつける為、あるいは築造により自身に注目が集まることで、それを昇進の足掛かりとしようと考えたのか、自分の屋敷の中

に「富士塚」を築造する。しかし、その完成前に左遷ともいえる大坂勤番弓奉行への転官の辞令が出る。行くべきか、数か月に渡り悩んだ末、重蔵は大坂に向かう。しかし、大坂では自身の持てる能力や才能を生かせず、その憂さを晴らすかのように毎日酒宴に興じ、自身の身分にあわぬ妻を娶るなど、多くの問題を起こす。これにより重蔵は奉行職を解任され、終世無役との処分がくだされ、江戸に戻る事となる。一方、重蔵の屋敷の中に造られた「目黒新富士」（富士塚）は江戸で評判になり、多くの人が訪れた。重蔵に自分の土地を抱屋敷としてもらった百姓の半之助は、重蔵の屋敷前に参拝客目当ての茶屋を作り、そこで蕎麦や酒を出し、大儲けした。そして、その金で周辺の土地を買いしめ、鷹匠の資格を買い、次第に権威を振り、重蔵との確執が大きくなっていく。やがて、半之助は徒党を組んで重蔵に嫌がらせをするなど挑発行動をとる。両者が対立する中、最終的に重蔵の長男である富蔵が半之助とその家族計5人を殺してしまい、近藤家は改易の処分を受ける。富蔵は八丈島に流され、重蔵も大溝藩（現・滋賀県高島勝野）に預けられ、死ぬまで幽閉される事となる。

こうした経緯を経た近藤重蔵と「目黒新富士」であるが、「目黒新富士」の詳細については、拙稿「富士塚・目黒新富士の築造」^{註1}で詳しく述べた。そこで本稿では、近藤重蔵に焦点を当て、重蔵の屋敷や富士塚の関連施設として重蔵の屋敷前に設けられた施設を取り上げる。さらに、その記録を検証し、関連施設の様子や設置意図を明らかにする。また、富士塚に付随する施設として造られた

1) 白根記念渋谷区郷土博物館・文学館

胎内屈の発掘調査により洞内から見つかった「太」の字の付く鬼瓦に注目し、そこから近藤家改易の原因が蝦夷地をめぐる関係者の遺恨による可能性を述べる。そして、最後に若干の考察を加えると共に、近藤重蔵という人物について述べたい。

目黒新富士の関連施設と周辺

(1) 近藤重蔵の屋敷

江戸時代「富士講」と言われる富士山を神と信仰するグループが江戸を中心に関東の広い範囲に「富士塚」と言われる小型の富士山を築造した。その一つが「目黒新富士」である。「富士講」は庶民信仰であるため、士族が参加することはあまり無い。しかし、「目黒新富士」については、富士塚の築造を考えた農民が、自分たちが浅間神社を勧請し富士塚を造るのでは許しがもらえないと考える。そこで、旗本の近藤重蔵に築造予定地を抱屋敷として貰い築造する。予定地は、見晴らしの良い崖の上で、築造場所を気に入った重蔵は積極的にそれに関わり、富士塚の近くに自身の屋敷を造る。この屋敷については、重蔵の長男である富蔵の書き残した「鎗丘実録」^{註2}に記述がある。

実ニ心垢ヲ洗ヒ天真ヲ観ルノ仙境ホカニハ
アラジト見聞感称セザルハナシ、又表門ノ
右ニ瓦^{フキ}ノ宴居ヲシツラヒ浅間ニ奇(寄)
附セシ墨^{フキ}千本ヲ奪取シテ庭前ノ用ニア
ツ、此家西ノ方七間ノ惣南西北ノ名山真芙蓉
峯眼前ニ眺望セリ

また、「目黒新富士」と周辺を描いた『鑓崎富士山眺望之図』^{註3}では、この記述を裏づけるように、瓦葺きと思われる寺院風の建物が描かれている。京都の金閣や銀閣のように東西南北の四面がほぼ同じ寸法と仕様と思われる2階建ての建物で、屋根中央に鳳凰と思われるものが付けられている。2階窓は上部が曲線の半円形に大きく開き、1階

窓も両端が曲線となる楕形(楕円形の半円)で大きく開かれているように見える。建物は中国風、あるいは禅寺風と思われる。この絵では、建物は塚より少し離れた北側に描かれ、2階建てを南に、北側に廊下と次の建物を描き、西側に直角に曲がって平屋の建物が続いているように見える。さらに、西側に伸びた建物の端には門と思われるものが描かれている。2階建ての南東側の少し離れた場所には仙元太神(浅間神社)があり、その神社との間の空間部分に刈り取られた黒朴が生えていたと考えられる。東側には木が生い茂っており、眺望は南・西・北の三方行であったと考えられ、両資料の内容が一致する。

重蔵の屋敷と富士塚の事件後については、拙稿「富士塚・目黒新富士の築造」^{註4}で述べたが、重蔵の屋敷に徳川家御三卿の田安卿が訪れたことから、「御三家・御三卿の訪れた場所は廃さない」との慣例により、近藤家改易後も富士塚と屋敷は残されたと考えられる。さらに記録を検証した結果、大正期まで残されていたことを明らかにした。また、岩科小一郎「目黒富士」^{註5}においては、大正9年(1920)に屋敷が改築された際の配置図が示され、重蔵の旧邸に習ったとされるその建物は、L字型である。配置は南側から北側に伸び、西側に直角に折れており、こらは『鑓崎富士山眺望之図』^{註6}や「鎗丘実録」^{註7}の内容とも一致する。また、岩科小一郎「目黒富士」^{註8}の記述では、「細長い建物の富士に面した側が全部九尺廊下になってゐて、その間の五十坪程の庭」とあり、2階建ての「宴居」につながる廊下部分などが「九尺廊下」であったことが伺い知れる。また、富士塚と建物との空間が50坪程であったと考えられる。さらに、岩科氏の記述では、「宴居」に当たる部分を「嘗ての重蔵の書齋」^{註9}と記述していることから、あるいは、一番眺望の良い2階が重蔵の書齋

を兼ねていたのかもしれない。

(2) 重蔵の石像・華表・黄幡について

富士塚関連施設、あるいは、周辺の様子を同じように、『鎌崎富士山眺望之図』^{註10}と「鎗丘実録」^{註11}を比較し、その実際を考えたい。まず塚の様子の記事として、

社ノ傍ラニ五尺ノ牌銘正斎先達白日昇天之所ト市川三亥先生ノ墨跡、頂ニ金霍ヲスエタルハ丁令威ヲ学フニヤ、又前屈ニハ甲冑ノ石像則チ守重毛人国征伐ノ姿タ丹柱ノ黄幡タカクフキナビケ

とある。富士塚の北側の重蔵の屋敷の隣（塚の北東）に「大仙元」の社があり、さらにその横（南東方向）には、重蔵が蝦夷（毛人）征伐をした際の鎧兜姿の石像を納めた石窟がある。さらに石窟の後方に「華表」があり、台座部分は「靈亀」で、その甲羅の上に四角柱の「華表」が建てられ、その上には金色の鶴が飾られていた。前記の「頂ニ金霍ヲスエタルハ丁令威ヲ学フニヤ」の部分であるが、「金雀」は「金鶴」の間違いだと思われる。1つには、『江戸近郊道しるべ』^{註12}に、「山のかたはらに華表を建、上に鶴一隻を置、書て伝、近藤正斎先達白日昇天之所、陰に文政二年某月某日と彫む」とある。2つには、前記の文章の「金雀」の後に続く「丁令威（ていれいゐ）」の話に出てくるのも「鶴」であるためである。「丁令威」とは、『搜神後記』^{註13}に出てくる物語の人物名である。「丁令威」は、前漢時代の人で、仙道を学び、靈虚山で修業し、千年経ってから鶴の姿に化して故郷に戻り城門の華表に止まり、その後天に舞い上がり戻らなかった（昇天した）という。そのため、その話から重蔵の「昇天の華表」の上に、金色の鶴を据えたのであろう。また「靈亀」は、中国の神話では、背中の甲羅の上に「蓬莱山」と呼ばれ

る仙人が住む山を背負っていると言われている。そのため、昇天し仙人となった「丁令威」との関係から、あるいは昇天し仙人となった（仙人になる）重蔵との関係から設置されたのかもしれない。さらに、「鎗丘実録」^{註14}の中で、重蔵が抱屋敷の建設用地として半之助の土地を見に行った際の記事に、「サナガラ仙境ニ遊フカト疑ル」とあるため、富士塚の建設地が仙人の住む場所のようだったからとも考えられる。さらに、鎗先の丘と富士塚を須弥山ととらえ、重蔵は自身を須弥山に住む仙人であると考えていたのかもしれない。

加えて「鎗丘実録」^{註15}には、「丹柱ノ黄幡タカクフキナビケ」とある。この「黄幡（おうばん）」であるが、「黄幡」とは葬儀の際に掲げる旗をいう。そのため、昇天の地にちなんで掲げられたことが考えられる。また、「黄幡」とは、曆本に記されている諸種の注記にある方角の吉凶をつかさどる神をさす。その神とは、八将神と呼ばれる神の中の黄幡神で、この神は軍陣の守護神でもある。そのため重蔵の甲冑姿の石像、あるいは蝦夷征伐との関係から掲げられたのかもしれない。この幡が掲げられた柱は「丹柱」とあることから、赤い柱と考えられ、わざわざ赤くされており、鳥居が赤いように「黄幡」を神と捉えていた可能性がこの記述からも考えられる。

加えて、「鎗丘実録」^{註16}の中には、重蔵が富士塚を的として矢を射って遊んだとして、重蔵が重蔵を「狂人ニヤ悪魔ノ所為トヤイワン」と非難し、仏神の罰が下ったと書いている。しかし、「黄幡」という神の方角に矢を射ることは吉とされており、武家では年初めにこの神のいる方向に矢を射る習慣があった。そのため、重蔵は年初などにその方向に矢を射たのではないだろうか。そうだとすると、重蔵は「黄幡」を八将神の中の黄幡神として認識していたこととなる。さらに、「富士塚」ある

いは「黄幡」に向かい矢を射ったのは、重蔵の奇行ではなく、儀礼や信仰心からであったのかもしれない。

さらに『鏑崎富士山眺望之図』^{註17}を見ると、富士塚の北東側に鳥居があり、その正面奥左（北西方向）に浅間社がある。さらに奥右（北東方向）に「華表」があるが、「重蔵の石像」あるいは、石窟は描かれていない。絵は新緑の季節を描いていることから、「華表」の建てられた文政2年（1819）の新緑の季節として春から初夏にかけて（2月～5月頃）を描いた絵だと考えられ、その頃には「重蔵の石像」は設置されていなかったことがわかる。さらに絵では、「華表」の右後方（東方向）に「丹柱」と考えられる柱が立ち、その柱が十字になるように竿のようなものが横に伸び、この竿状の棒に下向きに細長い長方形の旗を外側に1枚その旗の倍程の幅の旗を丹柱側に1枚、計2枚を片側に並べなびかせ、竿の旗とは逆端に縄が結ばれ、その縄は丹柱の根元に結ばれている。恐らく旗を納める際には、この縄をほどくと横に伸びた竿が丹柱に重なるように縦になり、旗が下がり旗を外すことができたのだろう。また、これは「黄幡」の方位の変化に伴い「黄幡」の位置を360度全ての方向に変えられるように作られていたと思われる。

この幡の類例として、『中国神話・伝説人物事典』^{註18}では、前漢時代の武将蘇武の物語（『梅雪争奇』）の挿絵の中にある。その図には城門から続く城壁の上に突き出た旗が描かれ、その旗竿がこれによく似た仕様である。さらに現代中国江南の蘇州の城門にも同様の旗竿があり、呉の国の旗が掲げられている。これはこの城門が作られた呉の時代、あるいは古い時期の中国の城門での旗の掲揚の仕方を再現していると考えられる。さらに、『中国歴史・文学人物図典』^{註19}で紹介されている、戦国時代の武将燕の物語（『百将図傳』）の挿絵に

同様の旗の掲揚の様子が描かれている。ただ、こちらは人の背丈程と思われる槍状の棒に軍旗を付けた手持ち用の旗をその槍状の棒ごと旗竿に付けたと思われる形で描かれている。

黄幡神が描かれる際には、甲冑姿の黄幡神が槍状の棒に「黄幡」と思われる幡を付けたものを持った姿で描かれる場合が多い。このため重蔵の屋敷前に設置された「黄幡」は、この黄幡神の持つ黄幡を作り中国風に掲揚したことが考えられる。

また、重蔵の屋敷（宴居）の外観も中国風と考えられる仕様であることから、重蔵の趣向を反映すると共に、当時先進国であった中国風とすることで、文化・教養を示すと共に富士塚を訪れる者の興味・関心を誘うような意図があったことも考えられる。あるいは前述の須弥山との関係から中国風とした可能性がある。

重蔵の屋敷（宴居）から「黄幡」を見ると、「華表」の鶴の後方の高い位置に「黄幡」が見え、両者はほぼ直線状に位置すると考えられる。もし仮に重蔵の屋敷（宴居）から「黄幡」に対して矢を射れば「華表」の鶴の上を矢が飛ぶことになる。先に見た『捜神後記』^{註20}の話では、「丁令威」が鶴に姿を変え、城門の「華表」の柱にとまっていると、これを少年が矢で射落とそうとする。そして鶴に向かって矢が放たれることで鶴は、それを避けるために空に飛び立ち天に昇り消えて行く（昇天する）。この話から、あるいは「黄幡」に矢を射ることで鶴の近くを矢が飛び、「昇天する」につながるとして、縁起が良いなどの考えからこの配置が考えられ、矢が射られた可能性もある。あるいは「黄幡」は、城門に建てられた華表との関係から城門に掲げられる軍旗の掲揚の形を取っており、両者はセットとして制作されたと考えられる。「黄幡」と「華表」の設置されている場所は、敷地の境界近くであると考えられ、「黄幡神」は、境より

悪いものが入らないように守る「塞の神」でもあることから、仙境の地と下界の境に設置されたのかもしれない。

前述のように「重蔵の石像」については、『鏑崎富士山眺望之図』^{註21}には描かれていないことから、設置時期が遅いことがわかり、さらに、『夢蕉録』^{註22}では、この像は富士講徒の作ったものであると書かれており、設置は、富士塚の石碑等の設置時期と同じく、6月の開山祭（築山祭）頃であったことが考えられ、設置時期からも富士講徒の設置が推察できる。

鳥居の設置されている方向であるが、浅間社に向けられているようにも、浅間社と華表の間に向けられているようにも見える。これはこの鳥居が「浅間社」・「華表」・「重蔵の石像（石窟）」・「黄幡」を対象に建てられ、これら全てを神として祀っていた可能性がある。

(3) 「太」の字の付く鬼瓦と重蔵への遺恨

① 「太」の字の付く鬼瓦について

富士塚の須走口を降りた辺りに浅間社があり、「黄幡」や「華表」の設置された場所がある。これについてだが、『鎗丘実録』^{註23}には、「須走ハ其儘ニテ大仙元丸木ノ鳥居ヲ麓ニタツ、下仙元御室浅間ト合殿ニス」とある。

この記述には、須走口を降りた所に鳥居を建て、「下仙元」と「御室浅間」を1つの神殿としたとある。『鏑崎富士山眺望之図』^{註24}でも社殿が描かれている。

ここには「下仙元」、「御室浅間」とあるが、吉田口二合目には、「小室浅間神社」があり、江戸時代には「下浅間」と呼ばれていた。そのため、この2つの名は、いずれも同神社を指すとも考えられる。この神社の社伝によれば、延暦12年（793）征夷大将軍坂上田村麻呂が東征の際、鎮座地より

富士山を遙拝して戦勝を祈願し、戦勝後の大同2年（807）、神恩に感謝して社殿を造営したのに始まるという。このことから、その例に習い重蔵の毛人国征伐（東夷）と、その戦勝に対し、社殿を造営したとも考えられる。

しかし、記述の神社は須走口に造られていることから、須走口を調べたところ、現在は失われた「御室浅間」があることが分かった。この神社は、須走口二合目にあったことから、『鎗丘実録』^{註25}の記述は、この神社を指していると考えられる。

「下浅間」については、現在そうした名で呼ばれる神社は無く、過去の記録からも一般に知られるところではない。しかし、須走口二合目以下で、該当する浅間神社としては、須走浅間神社（東口本宮富士浅間神社）しかない。そのため、二合目「御室浅間神社」と、登山道入口にある「須走浅間神社」を合殿として、富士塚の須走口を降りた所に鳥居を建て、その先に合殿とした「大仙元」の社殿を建てたものと思われる。

また、『鏑崎富士山眺望之図』^{註26}では、「大仙元」を「仙元太神」と記述している。その位置を現在の地図に当てはめると、「大仙元」（「仙元太神」）の社殿は「胎内屈」の発掘場所の辺りとも考えられる。「胎内屈」とは、洞窟を女性の体に見立て、それを通り抜け新に生まれ出ること、身の穢れが清められるとする場所である。富士講徒は、登拝前に河口湖の胎内屈を抜ける「胎内めぐり」を行った。これを例にすると、河口湖の胎内屈の入口には、穴を隠すかのように「無戸室浅間神社」の社殿が建てられており、周囲からはそこに穴があることが分からない。そのため同じように「目黒新富士」に付随するこの胎内屈の上にも社殿があった可能性がある。この穴については、鈴木白桃著『夢蕉録』^{註27}の記述があるのみで、「目黒新富士」を取り上げた他の諸書には記述が見られな

い。このことから、胎内屈は一般に公開されていなかったと考えられ、何らかの形で周囲からは見えない、あるいは隠された状態であったと考えられ、穴の上に社殿があった可能性が考えられる。

また、「御室浅間」は、『富士山東面口略縁起』^{註28}の「登山次第記」の記述によれば、「中宮御室の御所、祭神浅間太神薬師尊勸請なり、参詣人改場二ヶ所、此所より御胎内の窟に富士山女人頂上といふ」とある。この記述からは、ここが須走口の女人限界であり、そこに胎内があるとも読める。そのため「目黒新富士」の胎内は、それを再現した可能性も考えられる。ただ、現在「御室浅間」（須走二合目）付近では胎内は確認されていない。

さらに、『鑓崎富士山眺望之図』^{註29}では、「大仙元」（「仙元太神」）という神社は、小さい社のようにも見えるが、『鎗丘実録』^{註30}の記述からは、神主や巫女が常駐するような神社であったと考えられる。そのため、ここで参拝客の賽銭を受けたり、お札等の販売が行われ、塚に利益がもたらされていた可能性が考えられる。

また、発見された胎内屈は、鈴木白桃著『夢蕉録』^{註31}で富士講徒が掘ったことが書かれており、胎内屈の壁面には複数の富士講の講紋が刻まれるなどしていたため、富士講徒のための施設として利用されていたと考えられる。しかし、穴の発見時には、大量の土砂が穴を完全に埋める形で詰められていた。さらに、この土砂の中には、瓦なども含まれており、中には、「太」と文字のついた鬼瓦があった。この鬼瓦については、横山昭一「信仰と遺跡—東京都新富士遺跡を中心に—」^{註32}にかなり詳細に色々な可能性について考察されているが、具体的な結論には至っていない。ただ、同氏の論文の中で、「太」の文字を鬼瓦に付ける例は極めて稀であることが記されている。この稀な鬼

瓦は発見時には細かく砕かれ、土砂に紛れていたという。現在は破片をつなぎ合わせ、目黒区めぐろ歴史資料館に展示されている。細かい破片となった瓦が復元できる程に固まっていたということは、どこから運ばれてきた土砂に紛れていたという可能性は低く、埋められる際に何らかの理由で砕かれ、そのまま穴に投棄されたか、土砂の中に入れられた可能性が高い。そのため、この鬼瓦は胎内屈周辺施設の瓦であったと考えられる。

ここで注目したいのが「大仙元」である。これは『鑓崎富士山眺望図』^{註33}の記述では、「仙元太神」と記載される。「太」という漢字は、元々「大」の文字を縦に2つ重ねて書いたものの下の「大」の字を点で省略してきた漢字である。そのため、「仙元大神」（浅間神社）を2つ合社したことから、その「大」を重ね「太」としたことが考えられる。あるいは、先に見た『富士山東面口略縁起』^{註34}の記載にあるように、合社された「御室浅間」の祭神は、「浅間太神薬師尊」であり、この祭神の「太」の文字から使用されたことが考えられる。どちらにしても「大仙元」が、「仙元太神」と呼ばれていたことを考えると、「胎内屈」から発見された鬼瓦は、胎内屈の上に建てられていた可能性のある「仙元太神」（「大仙元」）の社殿にその神社名（祭神名）を示す「太」の文字が、神社の紋のように使用され、鬼瓦に付けられ、胎内屈を埋める際に社殿も壊され、その鬼瓦が砕かれ穴に投棄され、あるいは土砂に入れられた可能性がある。

鬼瓦が細かく砕かれていたことに関しては、かなり徹底的に痕跡を消そうとした。あるいは、強い憎悪・嫌悪・恨みといったものが感じられる。

これを実行した者として、殺された百姓の半之助の関係者が行ったことも考えられるが、現場は旗本屋敷であり、事件後は幕府の管轄になっていたと考えられ、施設を壊し、胎内屈を埋めるよう

な大掛かりな工事を百姓が秘かに行えたとは思えない。そのため、これを行ったのは幕府あるいは、その関係者と考えるのが妥当であろう。しかし、幕府関係者が「強い憎悪・嫌悪・恨み」を持ってそうした行動を取るだろうか。

これに関し「鎗丘実録」^{註35}に興味深い記述がある。半之助が武装し、仲間を引き連れ重蔵に嫌がらせをするのを重蔵が郡代官に伝え、半之助達は捕縛される。本来なら重罪とされてもおかしくなく、郡代官は、旗本に対しての暴挙は死罪に値するとしながらも、半之助達はそのまま村に返されることになる。そして同書^{註36}によれば、「横典檻石川主水丞ハ守重ト往時東夷ノ勤役ヨリ遺恨アレハタタ半之助ヲハ糺サス、守重ヲ落サント月ヲ経、日ヲ累ヌ」とあり、勘定奉行石川主水丞（忠房）が蝦夷地に関する役職の際に重蔵との間に遺恨があり、重蔵を落としめようと狙っていたためであるとしている。さらにそれだけでなく、重蔵が富士塚に甲冑姿の石像を置き、無断で神社を冠状したとして、寺社奉行が重蔵を問いただした件も石川忠房の策略であると書かれている。この件については、重蔵が交流のあった老中青山下野守に潔白を願い出ている。その結果、老中青山下野守は石川忠房を退け、同じく勘定奉行の曾我豊後守に命じ問題を解決させ、重蔵は無罪となる。この記述が正しいとすれば、石川忠房は遺恨から、重蔵をおとしめる機会を探っており、富士塚築造に関し、重蔵を罰しようと策略をめぐらせたが、失敗に終わったことになる。石川の遺恨についてははっきり分からないが、これについて蝦夷地に関する政局と2人の関係について見てみたい。

②蝦夷地政策と石川忠房の遺恨

蝦夷地政策は、松前藩が管轄する蝦夷地を幕府直轄として開発するという「改革派」と従来どお

り松前藩に委任し、開発しないと言う「保守派」が政局を二分し、その勢力争いといった構図で展開して行った。

寛政の改革を行った松平定信は「保守派」であったが、寛政5年（1793）辞職すると老中主座には「改革派」の松平信明が就任した。この信明政権下で重蔵は登用されることとなる。寛政7年（1795）重蔵は、長崎奉行手附出役となる。重蔵の赴任期間は、幕府が蝦夷地に端を発するロシア船とイギリス船への対応を迫られた時期であり、重蔵はここで蝦夷地や時局の動静を直に感じ学んだものと思われる。寛政9年（1797）江戸に戻った重蔵は蝦夷地海防策を公儀へ建白する。それが認められたのか、この年重蔵は老中から支配勘定へ転任を申し渡され、同時に関東郡代出役を申し渡される。4人の勘定奉行の内関東郡代を兼任しているのは、中川忠英1人であったので、その手附としての発令だと考えられる。当時の老中は戸田氏教・本多忠房で、勘定奉行は、久世広民・曲淵景漸・石川忠房・中川忠英で、全員が蝦夷地直轄を考える「改革派」であった。そのため、重蔵は蝦夷地に関して一貫して直轄・開発論に基づく「改革派」として行動を取った。

また、後に重蔵が転役する小普請方や御書物奉行を支配する若年寄堀田正敦も「改革派」であり、重蔵は中川や堀田の政策方針の実現に有能と評価され、それに応えるべく働いたものと思われる。当然石川も、当初は重蔵の蝦夷地巡察などの報告を元に政策案を作成するなど、重蔵は石川にとっても自身の考えを実現するために必要な人材であったと思われる。

寛政11年（1799）には、東蝦夷地仮上知が決定され、松平忠明が蝦夷地御用に就任し、石川忠房など4名が蝦夷地御取締御用に就任する。享和2年（1802）には、東蝦夷地の永上知が決まる。

続いて「改革派」は西蝦夷を含む全蝦夷地上知を行おうとするが、同年将軍の下知により、政策は一変し、上知は東蝦夷地のみで、西蝦夷地などは、従来どおり松前藩に委託することとなる。この結果、松平忠明・石川忠房は蝦夷地に関する役職を解任される。この年重蔵は、第4回蝦夷地巡察に赴くが、翌年小普請方に移動させられている。また老中主座であった松平信明も辞任となる。ここで蝦夷地については、「保守派」が主導することとなる。

前述の通り、「改革派」の多くが職を解かれるなど勢力を失う中、重蔵も小普請入りする。だが、その年重蔵は老中戸田氏教より「永々御目見以上」の格式が将軍から認められた旨を仰せ渡されている。これは、近藤家が世襲の旗本として公儀に認められたことを示すものであり、抱場の御家人から譜代の旗本に上昇したことになる。改革派が職を解かれるなど冷遇ともいえる処置を受ける中で重蔵は異なった扱いを受けているようにも思われる。文化3年(1806)老中戸田氏教が死去し、松平信明が老中主座に復帰し、翌年ロシアによる「文化露寇事件」が起こると蝦夷地全体の上知が決まるなど、再び「改革派」が主導権を回復する。しかし、そんな中、石川は勘定奉行の職を解かれ、西丸留守居役となり、文化5年(1808)には小普請支配となる。これにより石川は、幕府の政策決定のラインからは完全に外れることとなる。これに対し重蔵は松平復帰により松前奉行出役となり、蝦夷地巡察に参加するなど、蝦夷地政策に復帰する。さらに翌年には、江戸葉山文庫の書物奉行に昇進している。しかし、文政元年(1818)老中松平信明が死去すると老中主座には水野忠成が就任する。水野は「保守派」であり、翌年重蔵は左遷とも言うべき大坂勤番弓奉行へと配置換えされている。一方、「改革派」であり左遷されていた石川

は、この年勘定奉行の要職に就いている。松平信明政権下と水野忠成政権下では重蔵と石川の処遇が対照的である。ここに重蔵と石川の遺恨の原因があるのではないだろうか。

これを考えるに当たり、老中水野忠成の重蔵に対する評価がどのようなものであったかを水野の言動を近臣が記録した『公德弁』^{註37}から見たい。

一 近藤重蔵殿は堀田摂津守殿御目鏡に依而被_レ召出、御書物奉行、其後大坂御蔵奉行等被_レ勤人にて、彼が申事大躰行届、勢ひも盛なりける、主君若年寄御勤中、彼色々の事申上けれ共、公、唯心得罷在_レ段被_レ仰_レ計に而、御取用はなかりける、然るに大坂表不首尾にて帰り、其後屋敷近辺の百姓と争論し、御仕置となり、分部左京亮殿江御預け、同所於_レ在所_レ病死す、其節にいたり被_レ仰_レ計は、彼れは小人の学問したるに而、己れが役に而も無き諸役人の事を種々に悪評して、重き御役人衆を混乱せしむ

これによれば、水野は重蔵を堀田に見出され召し出された人物であるとした上で、重蔵の言動はだいたいにおいて行き届いており、その勢いも盛んであったが、水野は若年寄勤役中に重蔵の上申をことごとく退けたと記す。さらに、重蔵の死後、水野が重蔵を評し、身分の低い者が学問しただけであり、諸役人のことを悪く言い、重職につく役人を惑わせたと言っている。このことから、重蔵が大坂勤番弓奉行へと転任されたのは、重蔵を疎んじていた水野による左遷だと考えられる。左遷の具体的な経緯は、「鎗丘実録」^{註38}の「近藤正斎守重人行状略伝」に記述がある。これによれば、文政2年(1819)重蔵が葉山御文庫修造を進言した際に水野は聞き入れず立ち去ろうとしたため、重蔵が水野の袖をつかみ食い下がったことへの処

罰としての左遷だと言う。

また、石川についてだが、彼は「改革派」であり、水野にとっては政治的には対立するとも思われる人物であるにもかかわらず、勘定奉行の要職に戻す人事は、石川が重蔵による「悪評」により不遇にあった人物であったためとも考えられる。それが石川の遺恨の原因だったのかもしれない。

遺恨の理由は定かではないが、老中松平信明に重蔵が石川に対する何らかの批判をしたことが考えられ、それにより、石川が職を解任され、重蔵を恨んでいたことが考えられる。勿論、両者が直接何らかで争った可能性もある。

石川が重蔵の件に直接関わっていた資料としては、村田静子「近藤重蔵の自負と憤懣」^{註39}の中で紹介されている。これは、東京大学史料編纂所蔵の近藤重蔵史料「重蔵自筆書状草案」の文政8年(1825)2月の記述である。記述は、重蔵が富士塚を改築しようと幕府に届を出したため、役人が現場を見分にやって来たが、その際に、百姓の半之助が土地の境界問題を主張したため見分が終わらず、重蔵が吟味願を出すために書いた草案だと考えられる。

同年九月二十八日、場所見分のため松平孫兵衛(屋敷改)が出向いたところ、百姓半之助が境目の故障を申し出たので、差図が済まなかった。

それでは私の住宅に差支えるので吟味願をしようと調べているうちに、半之助の方から訴出て、十一月に石川主水正(忠房、勘定奉行)から訴状が廻ってきた。

私が訴状を熟読したところ、一向覚えのないことが認めてあった。

右地所は、八ヶ年以前寅年(文政元年)に同人より譲り受けた地所だが、同人は今以て私から代金を請取っていないしその後

七ヶ年来、私が御年貢を出してもいないなどという取こしらえ、武門の瑕瑾になることを申し立てている。

右について石川主水正の方で嚴重に取調べ、実否を分明にしてほしいと思い、訳書を差出しておいたが、今もってはっきりしない。

この資料により石川がこの件に具体的に関わっていたことが明らかになった。また同書^{註40}で紹介されている「重蔵自筆書状草案」(享和3年林述斎に宛てたと考えられる)に、重蔵が「石川如き細人」と記していたことが紹介されており、両者の関係が良くなかったことが察せられる。

また、石川の遺恨の話が事実でなかったとしても、重蔵が富士塚に「甲冑姿の石像」を置き、浅間社を勧請した件で寺社奉行が重蔵を呼び出した際に重蔵が老中に直接訴え不問としてもらった行動自体寺社奉行の面目を潰すものであり、寺社奉行が遺恨を持った可能性もある。さらに、先に見た水野の話が事実であるならば、幕府内に重蔵に遺恨を持つ人物が複数いた可能性がある。何よりも老中主座の水野が重蔵を疎んじていたと考えられるため。石川、もしくは寺社奉行、老中の水野など幕府の要職にある人物の命により、富士塚の信仰関係の物、あるいは重蔵に関する物を徹底的に破壊させた可能性があり、鬼瓦が細かく砕かれたと考えられる。

さらにこれに関して、富士塚に設置された烏帽子岩がある。拙稿「山正廣講について」^{註41}で述べたが、「鎗丘実録」^{註42}に重蔵の本邸より愛石を運んだことが書かれている。この石と思われるものが現在富士塚跡に残されている。しかし、この石は烏帽子の形はしていない。ただ、石には、「正斎重」「吉日戌申」との文字が残っており、「正斎重」とは、近藤重蔵正斎を指すと考えられ、この

石が重蔵に関わるものであることがわかる。さらに石にある「戌申」は重蔵の生没年中には、天明8年(1788)しか無く、この年重蔵は17歳で同志と「白山義塾」という塾を開いた年である。そのため、白山に見立てた尖った石で記念碑を造り本邸の庭に置いていた可能性が考えられる。烏帽子岩も尖った石であり、その記念碑を烏帽子岩に見立て富士塚に設置したことが考えられる。富士塚に残された石が尖った形をしていないのは、恐らく石の尖った上部3分の2程を打ち砕かれ下部が残ったためだと思われる。現在富士塚跡に残る他の2基の石碑は全く欠損が見られないことから、重蔵に関係する物、重蔵の痕跡を完全に消し去ろうとの意図から烏帽子岩が打ち砕かれた可能性があり、胎内屈より発見された鬼瓦だけでなく、烏帽子岩の状態からも重蔵に対する遺恨、あるいは罰として関係のある物が、壊された可能性が考えられる。

おわりに

本稿では、「鎗丘実録」^{註43}と『鏈崎富士山眺望之図』^{註44}の比較から、重蔵の屋敷や「目黒新富士」の関連施設として造られた「重蔵の石像」、「華表」、「黄幡」について考察した。『鏈崎富士山眺望之図』^{註45}で見られるように、「黄幡」と「華表」については、富士講徒が富士塚に設置した石碑等よりだいぶ早く設置されており、『夢蕉録』^{註46}の文政2年(1919)4月20日の記述に「華表」のことが書かれていることから、この時期にはすでに建てられていたと考えられる。「黄幡」と「華表」については、重蔵によって制作され設置されたと考えられる。これらについては、色々な可能性について前述したが、結論として、1つには、「黄幡」に向い矢を射るだけでも縁起が良いとされるが、「華表」の金鶴の近くを矢が

飛ぶことで「昇天」につながるとして、配置が決められたと考えられる。2つには、「黄幡」が設置されているのは敷地の端と考えられ、「黄幡神」は塞の神でもあるため、仙境の地である重蔵の屋敷の敷地と下界との境に設けられたと考えられる。さらに、その境界を城門に見立て、城門の内に設置された「黄幡」と「華表」があり、城の中、あるいは城主の住む場所と見立て重蔵の屋敷(「宴居」)が建てられたのではないだろうか。「鎗丘実録」^{註47}で「宴居」とされる建物を『鏈崎富士山眺望之図』^{註48}では、「小天」と記している。あるいはこれは「小規模な天守閣」の意かもしれない。四面が同じ造りであるこの建物の造りも、天守に似ている。天守閣を使用する者は、日本風に言えば城主だが、中国の影響が感じられるこの施設は、あるいは仙境の地に住む「王」、あるいは「皇帝」をイメージしていたとも考えられる。「小天」(宴居)の屋根に飾られている「鳳凰」は、すぐれた皇帝が現れると出現するとされている中国神話の伝説上の鳥である。また、皇帝の用いる色は、最も高貴な色とされる黄色である。「黄幡」を掲げたのは、重蔵が自尊心から自身が皇帝であることを秘かに示すために掲げたとも考えられる。あるいは、重蔵は活躍の場が与えられない役職の不满を暗に示したものだと思われる。さらに、老中水野の重蔵評を考えると、低い身分の出自であるために力を発揮する場が与えられなかったとも考えられ、そうした不满や出自への強いコンプレックスからの主張と考もえられる。加えて、「華表」や「黄幡」の様々な可能性について前述したが、これらはそのまま重蔵が誰かに自分の真意に気づかれた際の自己弁護の材料として重蔵により用意されたものであった可能性も考えられる。

これらのことから、「黄幡」や「華表」は重蔵の屋敷と一体の施設であったと考えられ、同じ時期

に造られた可能性がある。そのため、富士塚の石碑等の設置よりだいぶ早い時期に設置されたと考えられる。これまで、重蔵の屋敷と付属施設の詳細については、明らかになっていなかった。しかし、本稿では、資料の検証から、それについて詳細に述べ、可能な限り明らかにした。

さらに、富士塚の胎内屈と考えられる穴の発掘調査から見つかった「太」の字の付く鬼瓦について考察した。これは、胎内屈の地上部分に穴を隠すように建てられていた可能性のある「仙元太神」の社殿に神社の名を示す「太」の文字が神紋のように使用されたと考えられる。さらにこれは、「浅元太神」の社殿の屋根に葺かれた瓦に付けられ、胎内屈が埋められる際に社殿も壊され、鬼瓦がその中に入れられた可能性を述べた。さらに、鬼瓦が必要に細かく砕かれていることから、何らかの遺恨による可能性を指摘した。加えて、富士塚に設置された重蔵の記念碑と考えられる烏帽子岩が、大きく欠損していることを指摘した。そして、遺恨や罰として重蔵に関する痕跡を何者かが徹底的に消し去ろうとした痕跡である可能性を述べた。

重蔵への遺恨については、「鎗丘実録」^{註49}で記述されている石川主水丞（忠房）による遺恨の可能性を述べると共に、その可能性を検証した。最終的に石川の遺恨とは断定出来なかったが、幕府関係者の何者かが重蔵に遺恨を持って実行した可能性が考えられる。

なお、近藤重蔵については、幾つもの逸話が残され、多くが重蔵に人格的な問題があったと伝えるものである。しかし、必ずしもそれらは、批判されるものばかりではない。

例えば、権威を振るう鷹匠が道の真ん中を「お鷹」「お鷹」と言いながら歩き、皆それを恐れ避け通すのを重蔵は「お人」「お人」と言いながら正面から歩き鷹匠が道を譲ったとの話がある。^{註50}ま

た、酒井庄内侯の家来であった正木平太夫は、百姓が税の容赦ない取り立てへ抗議するのに味方して郡代殺害の罪を負い逃亡生活をおくる。そんな正木に出会い重蔵は、話を聞くと、知り合いに口添えを頼み、酒井の許しを貰ってやったという。

^{註51} さらに、細川藩家臣の宇野八十郎が酒宴で重役から罵られ、口論となった夜に重役が闇打ちに合い、その罪を着せられ逃亡し、重蔵に助けを求めて来る。すると重蔵は上野寛永寺の使者を装い細川家の上屋敷に乗り込み罪を問わないことを約束させたという。^{註52} これらの行動は、封建社会の中では、秩序を無視した行動ともいえ、徳川家の旗本として封建社会の中に生きる人間としては、非常に問題だとも言える。現に、そうした身分や秩序をわきまえない、言動や行動が、老中水野から重蔵が左遷を言い渡された原因であることが「鎗丘実録」^{註53}にもある。しかし一方で、これらの話は、まるでテレビ時代劇の主人公が物語の中で行うエピソードのような話である。こうした話からは、重蔵が英雄と言われるような素養を持つ人物であり、「正しいと信じて、身分や立場を超え、行動してしまう。」そんな性格で、決して権威に屈しない、反骨的な精神を持つ人物であったことが伺い知れる。

また、大坂での重蔵の様々な問題行動については、彼の人格的な問題からとも考えられるが、あるいは江戸に戻りたい重蔵の苦肉の策として、自ら役職が解任されるように謀った可能性もある。

他にも重蔵の逸話としては、大坂城内の土を売ったとか、借りた本の必要な部分を切り取り返したとか、借りた本を売り、それを知った持ち主が買い戻すと、それを伝え聞いた重蔵が、改めてその本を借りに来たという話など、色々な話が伝わっている。近藤重蔵という人を客観的に評価するためには、それらの話の信憑性を検証する必要が

ある。勿論、重蔵は英雄伝に出てくるような豪快な人物であるので、話の多くは事実かもしれない。しかし、置かれた状況、それに至った背景などが加われば解釈は変わってくる。

重蔵の人物については、鈴木白藤が、『夢蕉録』
註⁵⁴で書いている。

正斎が人の讒に聞て轻信し、忽ちに怒り、漸やく解を得ては頓みに覚り、遂かに猫のごとく温和に詫び入るさま、目前其の人を見るが如くである。由来正斎は傲慢の人なりしかども、亦極めて正直無邪気の人なりしこと、此の一事に就て推察することが出来る。

白藤は、重蔵を傲慢な人物であるが、極めて正直で無邪気な人であると言っている。こうした記録からも重蔵の人格が伺い知れる。

また、刃傷事件についてだが、半之助は、重蔵の熱しやすい性格を知った上で、度重なる挑発行動を取ったと考えられる。しかし、重蔵は怒りにまかせ自ら実力行使することなく、郡代官に半之助らを捕縛させる。しかし、無罪放免となってしまふ。この結果は、この問題の結末を大きく左右することとなる。これにより重蔵は自ら直接的に問題を解決せざるおえない状況に追い詰められる。さらに百姓と争い、万一旗本が殺害されても、近藤家としては、面目を保つために幕府に病死と届け出るしか無い。もしそれが公になれば不名誉な死を理由に家が取り潰されることも考えられた。そのため、武装して嫌がらせが行われる中、近藤家は屋敷を捨てるか、半之助らを打ち取る選択しか無かったと考えられる。しかし、当然百姓から逃げるようなことは、武士としても、重蔵の性格としても出来なかったはずである。そうになると、郡代官が半之助の罪を罰しなかった時点で、近藤家の選択は1つに絞られていたことになる。そう

考えると、刃傷事件を起こすことになったのは、重蔵を貶めようとする何者かの巧妙な策略により、そうした状況に導かれた結果だとも考えられる。

また、「仙境の地」という程に眺望の良い場所に造られた富士塚と重蔵の屋敷は、非常に多くの人から注目された。江戸庶民が富士塚に集まっただけでなく、重蔵の屋敷には、数多くの文化人や諸大名がやって来ており、さながら重蔵の社交場となっていた。そのため、そうした諸大名や著名な文化人との強いつながりから、この頃重蔵が再び重用される可能性を生んでいた。これに対し、重蔵に遺恨を持つ者、あるいは重蔵が力を持つことを恐れていた者達は、その危険を一刻も早く取り除きたいと考えたはずである。その結果として、重蔵を大坂に追いやり、あるいは刃傷事件へと導いた可能性も考えられる。

今まで述べたように、重蔵に関する話は、重蔵を批判する形での解釈のみが事実として語られるが、その真相は明らかになっていない。また、重蔵の人格についても批判的なものが多いが、これも同様である。

重蔵には問題もあったかもしれないが、それ以上に人を引き付ける魅力や豊富な知識、高い見識があったことが察せられる。そうでなければ、蝦夷地探検で活躍し、譜代の旗本に家格を上げ、奉行職を務めるようにはならなかつただろう。さらに、林学家八代の林述斎を始めとする当時のそうそうたる文化人や御三卿の田安卿を始めとする諸大名などと、幅広い交友関係を持つこともなかつただろう。また、松崎謙堂のように、近藤家改易後に重蔵の妻や子の面倒を見たり、近藤家再興に尽力するような人物も現れなかつたはずである。

近藤重蔵の評価については、権力に対抗する彼の反骨心から、為政者からは批判され、江戸庶民からも、百姓殺害事件の当事者として、批判の対

象と。そのため、重蔵を擁護する見解が示されず、批判的な評価が全くの事実として多くの人に受け入れられてきたことが、重蔵の人物像を歪めているように思う。

また一方で、戦前の日本においては、軍国主義や領土拡大の関係から、重蔵が英雄視された経緯もある。さらに戦後は、「北方領土」領有の論拠として重蔵の択捉島開発の事績が取り上げられるなど日本の北方統治・開発の先駆者として語られている。しかし、それは必ずしも客観的な評価ではないように思う。

今後は近藤重蔵を批判的に評する多くの記録、あるいは政治的な理由から実際以上に評価しているものに影響されることなく、個々の事例を客観的に分析し、近藤重蔵という人物を検証することが重要である。そうすることで、彼に関わる様々な事象を明らかにすることができるのではないだろうか。今年、「目黒新富士」が築造されてちょうど200年の節目の年である。また、ロシアとの北方領土問題が注目されているこうした機会に、重蔵に関する研究を進め、「近藤重蔵」という人物の人格や能力、業績などを客観的な形で明らかにし、評価していければと考える。

註

- (1) 松井圭太「富士塚・目黒新富士の築造」『伝承文化研究』第24号 2019年刊行
- (2) 近藤富蔵「鎗丘実録」『八丈實記』第四巻 八丈実記刊行会編 1966年 緑地社 18頁
- (3) 『鐘崎富士山眺望之図』
 東京大学史料編纂所蔵の資料に、「目黒新富士」(鐘崎富士)を描いた5枚の絵がある。①『武蔵国三田村鐘崎賽富岳八景図』(墨色)②『鐘崎富士山眺望之図』(墨色)

③無題(墨色・可菴武清画)④『鐘崎富士山眺望之図』(一雲齋歌川國長画・彩色)⑤『鐘崎富士山眺望之図』(扇面型・彩色)である。5枚の絵はそれぞれ異なる画家の手によると思われる。作者名の記された2名のうち、一雲齋歌川國長は、初代豊國の弟子である。もう1人の、可菴武清は、谷文晁の弟子喜多武清である。5枚の絵は便宜上付した数字の順番に視点が下がり、遠景になって描かれている。本稿で取り上げたのは②である。5枚共に構図や画題の入れ方が江戸時代に神社や仏閣を眺望で描いた木版画の形式と酷似しており、頒布を目的に制作された下絵とも考えられる。絵には文政2年(1819)に設置された華表が描かれ、新緑の季節を描いている。しかし、重蔵の石像が描かれていないことから、文政2年の春から初夏の開山祭前頃に描かれた風景ではないかと思われる。この年2月重蔵は大阪転役を申し渡され、10月に大阪に向かう。そのため、下描が書かれながらも、頒布の計画が中止された可能性が考えられる。

- (4) 前項(1)と同書
- (5) 岩科小一郎「目黒富士」(『あしなな』山村民俗の会 25号 1951年10月刊 28頁)
- (6) 前項(3)と同図
- (7) 前項(2)と同書 18頁
- (8) 前項(5)と同書 29頁
- (9) 前項(5)と同書 29頁
- (10) 前項(3)と同図
- (11) 前項(2)と同書 9頁
- (12) 村尾嘉綾『江戸近効道しるべ』(『江戸近効道しるべ』浅倉治彦編 1985年 平凡社 331頁)
- (13) 『搜神後記』巻上(『国譯漢文大成』文学部

- 第12巻晋唐小説 1923年 国民文庫刊行
会 国譯搜神記 巻の上 65-66頁
- (14) 前項(2)と同書 8頁
(15) 前項(2)と同書 9頁
(16) 前項(2)と同書 18頁
(17) 前項(3)と同図
(18) 瀧本弘之編『中国神話・伝説人物事典』(『梅雪争奇』蘇武の画) 株式会社遊子館 2010年 333頁
(19) 瀧本弘之編『中国歴史・文学人物図典』(『百将図傳』楽毅の図) 株式会社遊子館 2010年 29頁
(20) 前項(12)と同書 65-66頁
(21) 前項(3)と同図
(22) 鈴木白藤『夢蕉録』第7巻5月23日条(市島春城『市島春城古書説叢』青裳堂書店 1978年 663頁)
(23) 前項(2)と同書 16頁
(24) 前項(3)と同図
(25) 前項(2)と同書 16頁
(26) 前項(3)と同図
(27) 前項(22)と同書 663頁
(28) 『富士山東面口略縁起』年代不明(『富士山巡礼路調査報告書 須走口登山道』静岡県富士山世界遺産センター 2018年 264頁)
(29) 前項(3)と同図
(30) 前項(2)と同書 16頁
(31) 前項(22)と同書 663頁
(32) 横山昭一「信仰と遺跡—東京都新富士遺跡を中心に—」(『季刊考古学』第53号 1995年) 32頁-35頁
(33) 前項(3)と同図
(34) 前項(28)と同書 264頁
(35) 前項(2)と同書 13-15頁
(36) 前項(2)と同書 14頁
(37) 塩谷宕陰『公德弁』坤(『丕楊録・公德弁・藩秘録』日本史料選書七 北村正元校訂 近藤出版社 1971年 445頁)
(38) 前項(2)と同書(「近藤正斎守重人行状略伝」) 103頁
(39) 村田静子「近藤重蔵の自負と憤懣」(『日本歴史』第527号 日本歴史学会編集 1992年4月 吉川弘文館 62頁)「重蔵自筆書状草案」文政8年2月(近藤重蔵遺書 296-4) 東京大学史料編纂所蔵
(40) 前項(39)と同書 65頁 註(22) (「重蔵自筆書状草案」享和3年・林述斎宛て)
(41) 松井圭太「山正廣講について」(『伝承文化研究』第11号 國學院大學伝承文化研究会 2013年6月 43-44頁)
(42) 前項(2)と同書 16頁
(43) 前項(2)と同書
(44) 前項(3)と同図
(45) 前項(3)と同図
(46) 前項(22)と同書 662頁
(47) 前項(2)と同書 18頁
(48) 前項(3)と同図
(49) 前項(2)と同書 14-15頁
(50) 小野金次郎『近藤重蔵』教林社 1941 107頁-171頁
(51) 前項(50)と同書 164頁-165頁
(52) 前項(50)と同書 164頁-165頁
(53) 前項(2)と同書 103頁
(54) 前項(22)と同書 662頁